

「貧困の連鎖を解消する『現代の寺子屋』プロジェクト」の 成果と課題（最終報告）

Results and Continuing Issues of “*Modern Terakoya*” Project for Breaking the Chain of the Poverty (Final Report)

高 木 博 史*

Hiroshi TAKAGI

はじめに

本稿は、2011年度から2012年度の2年間をかけて沖縄県においてトヨタ財団の地域社会創造プログラムより助成を受けて行われた「貧困の連鎖を解消する『現代の寺子屋』プロジェクト」についての最終報告である。

本プロジェクトの概要や中間時点における進捗状況については、すでに実践報告『貧困の連鎖を解消する「現代の寺子屋」プロジェクト」の中間報告（以下、「中間報告」と略記）としてまとめられているが、本稿では、本プロジェクトの終了に当たり、その成果と課題について整理・総括を行う。

また、本プロジェクトの集大成として行った実態調査においては、一部ではあるが、沖縄県における「貧困の連鎖」の構造と実態が明らかになったということは特筆すべき点である。

1. 「貧困の連鎖を解消する『現代の寺子屋』プロジェクト」の全貌

本プロジェクト概要については既に中間報告で報告済みであり、重複する部分もあるが、最終報

告にあたり、改めて簡単に言及しておく。

本プロジェクトは、大手自動車企業トヨタ自動車が設立した公益財団法人トヨタ財団より2年間で433万円の助成を受け、沖縄県のX地区を中心に「貧困の連鎖を解消する」ことを目的に行われた。たとえば「言葉や発達に遅れのある児童、不登校児童、学校や職場に所属せずにいわゆるニートと呼ばれる未成年者、外国籍で日本語でのコミュニケーションが十分にとれない親、就労意欲はあるが基礎的な学力に自信がなく履歴書の記入等が困難な親、子育てに不安を抱える親などを対象」¹に支援が行われた。

上記のような困難を抱えている場合、放置すれば社会的に不利な状況に陥ってしまうおそれがあり、結果として生活困窮や貧困状況に至ってしまう危険が高い世帯（とその世帯構成員である子どもも含めて）となることが推測される。本プロジェクトは、こうした状況を少しずつでも解消していくために福祉関係者（ソーシャルワーカー）をはじめ、NPOや教育関係者が協働して「貧困の世代間連鎖の解消実践モデルを提起」することを目的とした試みである。そして、その具体的な実践活動として「ことばの教育（みのり塾）」「食育」「訪問活動」「しゃべり場」「放課後学習」「学習塾」「遊び」といった諸活動を行ってきた。プログラムの

*社会福祉学部助教

なかには、対象者の多くが中学生であり高校進学を目的とした「学習塾」「遊び」「しゃべり場」などについては、対象者が高校生となり比較的順調な高校生活を送っていることが報告されているため、本年度は行なわれていないものや発展的に形態を変えたプログラムも存在する。また、中間報告の時点でのとりくみとして言及していない新たな活動として、「お母さんの料理教室（食育の発展的とりくみ）」多子家庭の子どもたちを対象とした「子ども向け料理教室（食育の発展的とりくみ）」「子どもの一時預かり」「夜回り活動」といった活動がとりくまれた。

一方で、当初から「子どもの貧困」に焦点を当てて活動してきたプロジェクトであったが、その進行にともない子どもの貧困は、紛れもなく親の貧困であり、ひいては地域社会の問題として認識されなければ「貧困の連鎖」の解消には結びつかないことが問題意識として強く認識されるようになってきた。また、2012年度はグループに対する支援に加えて貧困や生活困窮を抱えた子どものいる家庭に対して、ニーズに合わせたやや個別的な支援を展開することで地域支援モデルの一つのあり方を提示する試みも始めた。こうしたグループを対象とした働きかけや個別的ななかかわりのなかで貧困や生活困窮の背景が単に家庭内や自己責任の問題のみに帰結させられない家庭・地域における構造的かつ深刻な問題であることが明確化してきたともいえる。

そして、この実態を明らかにするために立命館大学大学院石倉研究室及び本プロジェクトリーダーの繁澤多美氏が共同代表を務める NPO 法人 いっぱいっぼの会の協力を得て本プロジェクトの検証を行い、その集大成として「貧困の連鎖」の構造を明らかにするために2013年3月に実態調査（聞き取り調査）が行われた。

2. 本プロジェクトにおけるとりくみと成果

1) 前年度継続のとりくみについて

既に言及したように本年度は対象者がいなかったために取り組まれなかった活動を除き、元特別支援学級教諭によって行われている「ことばの教

育」、ソーシャルワーカーによる「訪問活動」、「放課後学習」などについては昨年度に引き続き取り組まれた。

大きな変化はなかったもののそのとりくみのひとつひとつが子どもたち、そして、その保護者とともにとりくんできた活動であり、着実に評価を得た活動であった。プロジェクト終了間際になっても「入学者」が絶えなかった「放課後学習」などについてはその一例といえるであろう。

また、「放課後学習」については、「現代の寺子屋」という機能を体現しているとりくみであり、本プロジェクトの大きな柱のひとつともいえる。2012年度より「NPO 法人まちなか研究所わくわく」によってボランティアコーディネート及びマネジメントについて大きな役割を担ってもらえたこともあり、本プロジェクトの目的のひとつであった地域における教育・福祉・NPO との協働のあり方を社会的に問題提起するモデル事業の一つとして一石を投じることができたのではなかろうか。

次に、最終報告に当たり、「放課後学習」に関わった学生ボランティアの声なども含めた2012年度の「事業報告」より一部を抜粋して掲載する²⁾。

「放課後学習」について

a. 寺子屋教室の概要（2012年度）

- ・ 目 的：放課後子どもたちの学習環境をつくる。コミュニケーションをとる。
- ・ 実施日：毎週3回（月曜、火曜、金曜）14：45～16：30
- ・ 期 間：2012年6月25日～2013年3月15日
- ・ 実施日数：70日
- ・ 登録生徒数：109人

低学年（1～3年生）が多く寺子屋を利用していた。高学年（4～6年生）はクラブ活動や塾などで参加者が少ないと考えられる。また、昨年度から続けている子どもが多くいると感じられた。登録はしているが、一度も来ない子どももいた。

「寺子屋教室」の登録生徒数（単位：人）

登録数	1年	2年	3年	4年	5年	6年
109	27	21	24	16	16	5

・月平均子ども参加者数（7月～2月）

6月のスタート時に比べ、参加者は減少していったが、毎月約30人は利用していた。毎回参加する子は10～15名程。

1年生は、11月下旬から参加者が増えていった。友達に誘われて参加する子が多かったように思われる。

生徒数に対する「寺子屋教室」参加者の割合

(単位：％)

	全年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
7月	50.2	8.5	14.0	14.0	6.2	4.3	3.2
8月	44.5	7.5	11.5	14.5	2.5	7.0	1.5
9月	40.8	7.8	10.3	11.7	3.8	6.6	0.7
10月	30.5	5.5	8.1	7.6	3.9	5.4	0.0
11月	33.6	8.6	7.1	10.0	4.6	3.3	0.0
12月	27.7	10.5	5.5	6.8	2.2	2.3	0.3
1月	27.5	11.5	5.8	6.4	2.1	1.8	0.0
2月	27.5	12.4	3.5	6.1	2.6	2.5	0.5
3月	27.3	12.3	4.7	5.0	2.1	3.1	0.0

b. ボランティアについて

- ・登録数：20人（固定：7～9人）
- ・所 属：大学生、専門学校生、社会人など
- ・交通費（1500円/1回）を支給
- ・1日のボランティアの数：3～4人
- ・ボランティアの寺子屋での動き：
 - 1) 寺子屋開始前に事前ミーティング。前回の子どもたちの様子をボランティアへ伝える。
 - 2) 勉強を教える。子どもたちと積極的にコミュニケーションをとる。
 - 3) 終了後「ふりかえりシート」に記入しミーティング。今日気になったことを話し合う。

c. 子ども達について

○学習について

- ・算数が苦手な子が多い。
- ・寺子屋では、宿題をやる子どもが多く、わからない点をボランティアの先生にきいていた。
- ・勉強は得意科目を中心にやる子が多く、苦手科目を強化するような様子はなかった。
- ・1、2年生はひらがなや漢字の書き順をバラバラに書く子どもが多かった。
- ・1年生は引き算、2年生は掛け算でつまずく子が多く、3年生の中には掛け算ができず割り算が解けない子もいた。ボランティアからも「1、2年生で計算の基礎力をつけさせたい」との意見がきかれた。

○寺子屋での子ども達の様子

- ・1学期はおしゃべり等多かった子どもも、2学期後半になってくると自分で時間や目標を決めて取り組めるようになっていた。
- ・子ども達の言葉づかいが荒かった。
- ・学校や家庭で何か起こると（先生に怒られた、家庭で問題があった等）、甘えてきたり、気を引く行動をとるなどの様子がみえた。
- ・学校行事や家での出来事を楽しそうにボランティアに話す姿があった。

○ボランティアとの関わり

- ・勉強を教えてもらうというよりもボランティアと話したい子が多い。お気に入りのボランティアさんがいるときに合わせてくる子もいた。
- ・子どもからは「来年もあるの？やってほしい」「家では勉強やりづらい。寺子屋で宿題終わらせたい」との声があった。

○ボランティアからの声

- ・子どもたちと勉強以外の面で関わりをもてたら良いと思う。
- ・寺子屋の先生から子どもに何か一言書くスペースがあったら、親、先生にも色々伝わる。
- ・自分が教えたことで、子どもに「できるようになった」と言われてうれしかった。

d. 評価と課題

- ・ボランティアを随時受入れることで、子ども達に多様な大人と関わる機会を作ることができた。
- ・子ども達は、自分で目標を立てる等勉強の仕方を身に付けたのではないかな。
- ・ボランティア間での毎回の振り返り会は、子どもの様子を共有できボランティアみんなで対応できた。
- ・寺子屋での様子や学校、家庭での様子を担任の先生と共有できると子どもをフォローできる。

(「放課後学習支援寺子屋 平成24年度事業報告」より一部抜粋、掲載に当たり趣旨を変えずに一部修正)

2) 2012 年度における新たな取り組みについて

「お母さんの料理教室」



本プログラムは、前年度に実施していた「食育」プログラムの発展的取り組みであるといえる。本料理教室は、一般的な料理教室とはその形態を異にしている。それは、仕事等で従来のような一堂に会する方式ではなかなか参加できない保護者のために考え出されたものである。それぞれの保護者が時間がある際に食材を選別・購入しそれにレシピを記入しておくことで、そのレシピどおりに調理を行えば料理が出来上がるというものである。これをいくつかの家庭でローテーションで回すことにより、当プログラム参加者の家庭における料

理のレパートリーを増やしていくことを目的としている。また、このプログラムの最大の特徴は、サポートは行うもののソーシャルワーカーや教育関係者が主導的な役割を果たすのではなく、保護者の主体的なとりくみであることである。このプログラムによってふだん「支援者」として関わっている側も、「レシピ」をうまく作っていく「お母さん」たちの潜在的な能力や可能性に気付くこともあり、直接的に学び教わることもあったという意味でプログラム参加者がともに学び育ち合うことができた。

「子ども向け料理教室」



ハンバーグやカレーライスづくりを行った。
写真はハンバーグづくりの様子

沖縄には4人以上の多子家庭も少なくなくそれが生活困窮の原因となっていることもある。こうした家庭にとっては「食」をどのように確保していくのかは大きな課題となっている。外食や弁当購入ばかりでは健康的でなく、経済的負担も大きくならざるを得ないであろう。一方で、自宅で料理を行う力を身に付けることで外食や弁当に頼らない食生活を展望することができ、生活改善につながるきっかけとなる可能性も考えられる。たとえば、兄弟姉妹が力を合わせて料理を作っていくというプロセスを通して、社会や家族における様々な関係性を学習していく機会となっていくだろう。このように、本プログラムは「食育」の発展的プログラムとして位置付けることができる。

多子家庭であっても、保護者が共働きや一人親の場合も少なくなく、子どもたちが、自ら料理を作ることで少しでも栄養価の高いものが摂取でき、かつ食材の選別等含めて節約術も身につけていく

ことを目標としている。

「子どもの一時預かり」

「子どもの一時預かり」も実施した。本プロジェクトで対象としてきた世帯の中には共働きや仕事によって子どもの面倒を十分に見ることができない状況が生じることもあった。時には育ち盛りの子どもたちの食糧確保等も含めてNPOと共同し、一時的に子どもを保護するといったプログラムである。詳細は記すことができないが、厳しい借金の取り立てやDVといった子どもの育ちに悪影響を及ぼすと思われる状況に陥ってしまった家庭の子ども居場所として機能してきた。また、こうした子どもたちの行き先として、養護施設で保護するのではなく、ソーシャルワーカーなどの関係者や専門職が協働することによって地域における子育て／子育て支援のあり方として選択肢を提示できたこともこのプログラムの意義といえるのではないだろうか。

「夜回り活動」

この活動は、一般的にもかなり浸透してきたいわゆる「夜回り活動」である。NPOの職員などを中心に本プログラムの対象地域の巡回等を行い、夜遅くまで徘徊をしている子どもたち等に声かけを行う活動である。

様々な事情により、深夜まで保護者が家に帰ってこない、あるいは家族関係がうまくいっていないなどこうした行動を引き起こす要因は複合的ではあるが、地域全体で子どもたちを見守っていく活動として本プロジェクトにおける活動の一つとして位置づけたものである。

「貧困の連鎖」に関する実態調査の実施

プロジェクトの最終段階に臨むに当たり、2013年3月上旬の約1週間、立命館大学大学院石倉研究室、NPO法人いっぽいっぽの会の協力を得て調査メンバーを構成し、本プロジェクトに関わった子ども、保護者、地域住民、本プロジェクトの「ことばの教育」を担った「みのり塾」主宰の元特別支援学級教諭などを対象とし、地域の親と子どもの暮らしと生い立ちを把握する調査を実施した。本調査は、一人一人の暮らしの現実の中から地域

協働のあり方、親と子どもにしっかりと寄り添った相談・支援活動が続けていく方向性、行政的課題、社会的支援のあり方などを模索する上でもっとも基本的なニーズをつかみ取ることを目的としている。

約30名の方に聞き取り調査を行い、健康状態や病歴、学歴・仕事歴、転居・住宅歴、家族歴(結婚・出産等含む)などを中心とした生活史を中心に把握し、分析を行うことで貧困の構造を明らかにする試みである。高校生以上の調査対象者には調査同意書にサインをしてもらっている。

本調査の結果からは、学歴社会は崩壊したといわれ久しいが、依然として「学歴社会」の壁が存在していることが改めて明らかになった。とくに、短期大学や大学への進学を経済的な事情等で断念せざるを得ず、高校中退や定時制高校への進学等の学歴を持つ者も少なくなかった。他方、ソーシャルワーカー、みのり塾などとの継続的な関わりによって生活が変化してきたことに言及されることも少なくなかった。

沖縄県において「貧困」及び「貧困の連鎖」に関連する体系的な調査はほとんど行われておらず、また、「貧困の連鎖」という事象が単に困窮当事者たちの自己責任のみに帰結することではないという調査に係る問題意識が、日々のかかわりや実践活動の中から明確になってきたことから本調査を行うことが十分に意義のあるものであった。詳細な調査結果については本報告とは別途、調査報告書の発行を予定している。

本調査を通し、「貧困の連鎖」の解消に取り組むためのいくつかの課題も明らかになってきた。まず、子どもの教育にかかる費用についての抜本的な改革が必要であることが明らかになった。とくに、今日において、生活保護世帯における大学進学が基本的には認められていないことなどを勘案すると、「自立助長」を謳う生活保護行政のあり方も問われるべきであろう。

また、地域生活支援のあり方についても、行政のみではきめ細かい対応が難しい部分についてNPOや地域における社会資源の存在意義が示されている。たとえば、調査対象者の中には、ソーシャルワーカーやNPO、あるいは、みのり塾といった地域における社会資源とつながったことが、

その後の生活改善に大きな影響を与えていることに言及した者がいたことは、本プロジェクトの意義が大きく評価されることであるといえる。

一方で、調査において把握された生活の実態から、とくに本来公的責任で行われるべき生活保障、あるいは生存権保障の部分において、飽食といわれる現代日本において、当面の食糧等が十分に確保できない厳しい生活実態が存在することを社会的に問題提起していく必要性が明らかになった。



調査の打ち合わせをする大学院生たち

3. 本プロジェクトのまとめと今後の課題

助成期間が終了し、プロジェクトの終了を迎えたが、当初計画していた内容については十分とはいえないまでも、具体的かつ多様なプログラムを準備した実践活動の中から貧困や生活困窮に至るプロセスや社会的背景を明らかにし、「貧困の連鎖」の構造を広く社会的に発信する必要性を認識するに至り、一定の成果を収めたことは確認できた。

とくに、「貧困の連鎖」のひとつの要因ともいえる親の「学歴」のみならず「生活史」が子どもの「育ち」にどのような影響を与えているのか、また、「親の思い」はどのようなものかといったことについて、2年間の関わりのなかで一定の信頼関係を築く中で明らかになってきたことは大きな成果である。また、地域における「見守り」や地域生活支援のあり方とはどのようなものであるのか、また、

それらに対して行政、教育、NPOなどの地域の社会資源、あるいは、子どもの「育ち」をサポートする公的機関は何をするべきなのか、多くの問題提起を投げかけたのではないかと考える。

一方で、本プロジェクトで得た成果をどのように発展的に地域に活かしていけるのかという課題がいくつか残されている。

とくに財政的な問題や「子どもの貧困」や「貧困の連鎖」という問題に対し、学校関係者や福祉関係者のみならず、地域における継続的な協力者を発掘していかなければならないが、どのようにそのような人々を確保していくのかということについてはさらに時間をかけて検討していく必要があるだろう。

また、本プロジェクトに関わった当事者のプロジェクト終了後の生活実態や生活改善の状況について追跡調査を行い、本プロジェクトの成果を検証する必要性もあるだろう。

最後に、これらのプロジェクトで得られた知見と成果を地域に還元し、「貧困の連鎖」を解消していくための具体的方法の検討を行っていくために、子どもたち、教育関係者、福祉・NPO関係者、地域住民などの関係をどのように構築していくのかということが私たちに課せられた最大の使命である。その足掛かりとして、ネットワークづくりの一端を担った本プロジェクトの意義を認めることができるだろう。

謝 辞

本プロジェクトの遂行に当たり、たくさんの方のご支援を得ることができた。本プロジェクトは無事に終了し、明日への希望につながる成果を残し、本プロジェクトの趣旨を活かした新たな動きも芽生えることとなった。2年間にわたり助成を頂いた公益財団法人トヨタ財団をはじめ本プロジェクトの企画・遂行にあたりご参加・ご協力いただいた全ての関係者諸氏に最終報告のこの場を借りて感謝の意を表したい。

注

- ¹「貧困の連鎖を解消する現代の『寺子屋』プロジェクト」
『トヨタ財団 2010 年度地域社会プログラム応募用紙』
- ² 放課後学習支援寺子屋 平成 24 年度事業報告

参考文献・資料

貧困の連鎖を解消する現代の『寺子屋』プロジェクト』『トヨタ財団 2010年度地域社会プログラム応募用紙』
公益財団法人トヨタ財団（地域社会プログラム）
<http://www.toyotafound.or.jp/project/community/index.html>（2012年4月現在）
「貧困の連鎖を解消する『現代の寺子屋』プロジェクト」ブログ
<http://gendainoterakoya.blog.fc2.com>（2012年4月現在）
高木博史『「貧困の連鎖を解消する「現代の寺子屋」プロジェクト」の中間報告』『長野大学紀要 第34巻第1号（通巻125号）』2012年
「放課後学習支援寺子屋 平成24年度 事業報告」